【第3494回】2023年11月8日（水）

YAMAGATA ROTARY CLUB

RI第2800地区

山形ロータリークラブ例会報

Rotary　世界に希望を生み出そう

Create Hope in the World

『世界に希望を生み出そう』

2023-2024年度RIテーマ　会長 ゴードン R. マッキナリー

山形ロータリークラブ テーマ

ディスカバー山形 オンリー山形

会長／田中 達彦

幹事／與田 貴博

■ 点鐘／12：30　■ 例会場／山形グランドホテル：サンリヴァ　■ 出席報告／54名（会員数 86名）

会長メッセージ

私の「最上川物語」　～大石田と斎藤茂吉～

今日は私のルーツである大石田町と歌人・斎藤茂吉の話をします。今では新幹線の駅こそあれ小さな田舎町に過ぎませんが、江戸末期から明治期には最上川の舟運で大変栄え、酒田を別にすれば最大の港町で、わが家はそこで代々医者を営んでいました。実は「最上川千本だんご」の場所で、あそこに残っている蔵座敷が田中家の蔵です。

大石田は、鉄道や道路が整備され舟運が衰退すると、地主の多い、いわゆる「旦那衆（だんなしゅ）町」となりました。明治後期の高額納税者番付をみると酒田の本間家が第1位で、大石田の旦那衆がランキングに名を連ねています。私の四代前に当たる田中豊という人物は、医者を人に任せ、大石田銀行の雇われ頭取になり、銀山温泉のリノベーションに尽くした人で、銀山に別荘を持っていました。

戦争直後、斎藤茂吉が２年弱大石田に住み、その別荘を訪れ短歌を一首詠みました。それが収められた「白き山」は茂吉の14の歌集の中でも最高傑作の一つと言われています。特に最上川を詠んだ歌は100首に及び、とりわけ秀逸とされています。「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」はその代表作です。

私がかねてから疑問に思っていたのは、なぜ茂吉が大石田でその様な傑作を生み出したのかということです。確かに最上川の春夏秋冬の風景は美しいですが、既に舟運は衰退し平凡な田舎町です。最上川のほとりに座って川の流れを見たり、丘から空や雲を眺めていたりしてなぜあの様な歴史に残る秀歌が生まれたのだろうか。

それは大石田の町や人が持っている「ホスピタリティ」だったのではないかというのが私の仮説です。私は、子供の頃から大石田に行く機会が多く、大石田の人たちと接していますが、人なつっこいというか、無条件に心を開いてくれる人が多くて、「そこにいるだけでホッとする何か」を感じます。これは自分のDNAのせいだけでも無いような気がします。

この大石田独特の気風・土地柄は、米沢や鶴岡の様な城下町や山形の様な商人町とも違う、どちらかというと同じ港町である酒田に近いものではないかと感じています。それが茂吉の心に何かをもたらし、あの様な傑作を物することができたのではないか。これまで様々な茂吉研究が行われて来ましたが、それとは別次元の妄想の様なものですが。今回大石田町に若い町長が誕生しました。個人的にはこの「ホスピタリティ」を活かして欲しいと期待しています。

ここに来て山形のファンや理解者が増えているのを肌で感じておりうれしい限りなのですが、自然や食べ物をさらにアピールするためのキーワードは「ホスピタリティ」ではないかと思います。これから例会では、「ホスピタリティ」をキーワードにお話したいと思います。

ニコニコ情報

● 長谷川憲治 さん
お陰様で昨日で結婚20周年を迎えました。長男は、49歳ですけど。

● 伊藤　吉明 さん
昨日迄、京都に行ってきました。一昨日の晩には、米山奨学生だった方欣同（ホウキンドウ）さんと食事をしました。結婚されていて、とても元気そうでした。皆様によろしくとのことでした。

● 佐藤利右衛門 さん
山形県初の右ヒザのクーリーフ手術を受けて来ました。手こずり出血もありましたが生きて帰って参りました。皆さんにもおススメ出来る手術です。

● 田中　達彦 さん・與田　貴博 さん
我らの阪神タイガース。激戦の日本シリーズを制し、遂にアレのアレ達成しました。感謝と歓喜を込めてニコニコします。

ニコニコ委員長
五十嵐さん

與田幹事　田中会長
阪神タイガース38年ぶりに優勝しました!!

四つのテスト　真実かどうか　みんなに公平か　好意と友情を深めるか　みんなのためになるかどうか

1950年8月5日 RI加盟承認　承認番号7587号（なごやか）
■例　会/毎週水曜日12:30開会点鐘　第5週18:00開会点鐘　■例会場/山形グランドホテル
■事務局/山形市十日町1－1－26－2F　■TEL：023－632－7777　■FAX：023－624－5200
■E-mail：yamagata09@rid2800.jp

ホームページはこちらから

パスワードは事務局へお問合せ下さい。

会員卓話　不滅の法燈

株式会社山形銀行 代表取締役会長　**長谷川吉茂** さん

はじめに

只今御紹介のありました山形銀行の長谷川でございます。私自身、山形ロータリークラブの会員でありますが、10年程前に桂木君が出席義務免除会員にしてくださったことから、爾来活動に参加せずにすまして来ましたので、今日は久方ぶりの参加ということになります。

また、今回の卓話については新会長になられた田中君の依頼によるものです。田中君のおじい様は大石田の出身であり、私の母の父親は戦前に大石田の町長を務めた庄司信吾、尾花沢の徳良湖を作った人物ですが、田中君のおじい様はその後に町長になった人物であります。また、お母様には裏千家の山形学校茶道連絡協議会の幹事長として御活躍頂いた関係があり、私が茶道裏千家今日庵老分・東北地区長・山形支部長を務めておりますことから、私としては断りきれない関係がありお受けした次第でございます。

尚、ロータリークラブでの卓話は県内外で10回以上したことがありますし、講演となると、私は一応30分以上の話を講演としておりますが、山形に戻った35歳以降、現在まで39年間で1315回、年間30回以上を数えることになります。講演内容については覚えておりませんので、今回のテーマであります「不滅の法燈」についても近年は記憶にありませんが、以前は何度かお話をしたことがあります。ですので、私よりもお詳しい方がおられるかとも思いますが、それについては御容赦頂きたいと思っております。それよりも、皆さんにはこれから是非この話のスピーカーになって山形の宣伝に努めて頂きたいと念願しております。

不滅の法燈

2013年４月27日から５月31日までの約一カ月間、宝珠山立石寺（通称 山寺）の本尊であり国指定の重要文化財でもある薬師如来が50年振りに御開帳されました。今年はそれから丸10年が経ちました。

立石寺は第３代天台座主慈覚大師円仁（794～864）開基とされ、今年は円仁の1160年御遠忌に当たります。尚、松尾芭蕉（1644～1694）が「閑さや岩にしみ入る蝉の声」と詠んだのは元禄２年（1689年）、５月27日。今の暦では７月13日に当たります。この蝉が何ゼミかについては斎藤茂吉（1882～1953）と小宮豊隆（1884～1966）との有名な論争があり、実際に調べた結果、斎藤茂吉のアブラゼミではなく、小宮豊隆のニイニイゼミに軍配が上がったといいます。

比叡山延暦寺は788年（延暦７年）、伝教大師最澄（766～822）によって開基されました。今年は最澄の1201年御遠忌に当たります。総本堂、根本中堂に献じられた法燈は最澄が中国浙江省にある天台山から持ち帰ったものとされ、最澄が「明らけく後の仏の御世までも光りつたえよ法のともしび」と詠み願った「不滅の法燈」であります。それから72年後の860年（貞願２年）に延暦寺第３代座主となった慈覚大師円仁によって立石寺は開かれ、延暦寺の法燈は立石寺に授けられました。しかし1571年（元亀２年）、織田信長（1534～1582）は３万の軍勢で比叡山を攻め、全山が火の海と化しました。「不滅の法燈」は消え、比叡山の再興はもはや不可能と思われましたが、その時、立石寺の法燈が最上川や日本海を渡り比叡山に届けられ、法燈は見事に蘇りました。こうして1200年余り、京都延暦寺根本中堂と山形の立石寺根本中堂という東西に輝く法燈は、人々の魂を導き続けております。

そこで知っておいてほしい言葉に「油断」があります。「油を断つ」こと、つまり油を絶やしたり、うっかり火を消してしまうことです。大事な法燈、油の中にある軸心にともる火を消さないこと。法燈を守り伝えていくには、油を絶やさないことが大切です。「油断しないこと」です。

伝統と伝燈

また、「伝統」という言葉もあります。私はこの解釈の方が好きです。「伝統」の統は、糸へんに充足するの「じゅう」の字を書くのが一般的ですが、この書き方は明治以降に定着したものだそうです。しかし、伝え統べる「伝統」には「完成されたものを形を変えずに墨守する（頑固に守る）」というイメージがありますが、本来の表記は「とう」の漢字が火へんに、山を登るの「のぼる」の字を書く、あかり、ともしびを意味する「燈」であります。これが、仏教用語でもある「伝燈」です。つまり師から弟子に対し、師の教えでもある伝統の炎を伝えることです。そこでは本質となる部分さえ守っていれば、時代に応じて変化していっても構いません。それが伝燈です。また、そうでなければ、物事の本質を伝えることは出来ないでしょう。炎は油を注がなければ消えてしまいます。常に新しい油を注ぐことが創意工夫であり、イノベーションでありますが、それを注いでいないと火は消えてしまいます。伝燈の継承（受け継ぐこと）とは、今に生きる人達を巻き込んだ非常にダイナミックなものなのです。

おわりに

最後に一言述べさせて頂きたいと思います。ポストコロナの時代を迎えております。想像していた以上に経済社会の流れは早く、以前の産業のあり方に戻ればよい、という訳にはいかないと感じております。

脱炭素化やDX（デジタル・トランスフォーメーション）化への対応急務でありますが、それに対応する人材は圧倒的に不足しております。以前から申しあげておりますが、確かにCHANGEはGからTを外せばCHANCEになります。つまりチェンジはチャンスであります。大きな変革の時代、それをチャンスと認識しチャレンジしていくことが肝要だと思います。山形銀行の今のキャッチフレーズは、「挑戦がやまがたを強くする。」であります。参考にして頂ければと思います。

長谷川さんはこのたび裏千家茶道の雑誌「なごみ」11月号に執筆しました。

祖父吉三郎さんと親交の深かった陶芸家・板谷波山にまつわる話で、茶席のお菓子として佐藤屋の『まゆはき』『梅しぐれ』も登場します。

「なごみ」2023年11月号
（淡交社）

編集後記

今年もあっという間に11月に入りましたが、これまで例年になく季節外れの暖かい日が続いてきました。予報によれば、今週末あたりから一気に気温が下がり、冬への支度が必要な状況になってくるようです。新型コロナの影響でしばらく発生数が抑えられていたインフルエンザも今年は全国で流行し始めている旨、報道されています。今後、気温の変化の激しさも加わり、何かと体調を崩しやすい時期ですので、十分に留意して過ごしていきたいですね。みなさま、どうぞご自愛ください。

（担当／筒井政行）